小林多喜二伝——小林多喜二と小樽——

庁商の時代，後半

倉田　稔

目　次

はじめに

15　高田紅果（紅花）と並木凡平

16　文学

17　学業

18　多喜二の家は貧しかったのか？

19　庁商時代の作品

20　帽子の白線

21　投稿「駄菓子屋」が没になったわけ

22　小樽図書館

23　校長排斥運動

24　鈴木信

25　先生たち

26　庁商での同窓生

27　庁商での「想い出」から

28　『素描』

29　店先で

30　高商受験

31　３人だけの入学

32　小樽，点描

はじめに

小林多喜二の庁商入学以前は，『人文研究』86輯，そして87輯の前半で，書き，庁商時代前半は，同87輯で書いたが，本稿では小林多喜二の庁商時代後半を扱う。これで評伝第1部が終わることになる[1]。

小林多喜二の小説や作品は，戦前，全てが出版されたわけではない。また出版されたものでも，伏字が沢山あった。戦前これらを所有しているだけでも，警察に捕まった。これらは，戦後になって発表され，あるいは復元された。その意味で，多喜二作品は新しいものである。

なお私は，小林多喜二を描くにあたって，彼と実際に会った人々，つまり家族・友人の記述を最大限に重視している。

15　高田紅果（紅花）と並木凡平

啄木と友人になり，後，多喜二と多分顔見知りになる高田紅果，そして多喜二と関連を持つ並木凡平について，述べよう。

高田紅果[2]（ペンネーム）は，明治24年2月，小樽に生まれた。1人息子だった。彼は，お洒落で気の弱い，しかも我ままな，いわゆる坊や育ちだった。量徳小学校を卒業し，私立の商業学校[3]に学び，講義録で勉強して卒業証書をとったという勉強家であった。彼は16歳の年に，保険代理業奥田商

（1）この伝記は次のような順番で読んで戴きたい。
　1．「小林多喜二と小樽」（『人文研究』86輯）
　2．「小林多喜二伝」（『人文研究』87輯）
　3．本号
　4．「小樽高等商業学校と渡辺龍聖」（『商学討究』44巻4号）

（2）以下，越崎宗一「紅果と啄木歌碑」による。

（3）明治28年から30年まで，同名の学校が他の場所にあった。また小樽商業は，明治34年に私立小樽商業学校（乙種）として創立（設立改組？）された。花園町16番地であった。明治40年に緑町に移った。庁商開校を機会に，私立北海商業学校と改めた。

会に入社した。

彼はすこぶる多方面の趣味人で，碁，将棋，玉突，謡曲，小唄，洋画，スケート，何でもござれだった。少年時代から文学に熱中し，明治40年11月，小樽日報記者をしていた石川啄木を，友人藤田南洋と2人で訪問した。

翌年1月，啄木が小樽日報を退社して釧路新聞へ就職が決まり，その赴任の直前に，やはり南洋と啄木家を訪問した。この夜は天才文学青年啄木の博識にハッパをかけられ，2人ともすっかり感激して帰ってきた。紅果を詠んだ歌は，「一握の砂」にある（既述）。

一方，その後，釧路をやめて4月に上京することになった啄木は，小樽に残していた家族をまとめて引き揚げるため，ふたたび小樽へもどった。4月15日，南洋と紅果は啄木を訪ね，色いろ文学談など交わして深更に戻った。

紅果は，大正期に小樽で発刊された文学雑誌「海鳥」「白夜」「群像」(4) などに小説，評論，翻訳などを発表している。彼はフランス語を天主教教会のフェルゴット師について習った。

大正6，7年ころ，小樽の進歩的インテリ連が思想的文化的団体「啓明会」をつくり，北大や高商の教授などを招いて時々講演会を開いたが，紅果はその世話係をつとめた。当時「啓明会」は，特高から要注意として絶えずにらまれていた。高田は，昭和30年に亡くなった。

並木凡平は，本名が篠原三郎（1891-1941）である。明治24年に札幌の元村で生まれた。明治31年ころ，父に伴われて台湾へ渡り，台北公立学校から府立の国語学校の中学部を卒業した。再び北海道にもどったのが明治40年といわれる。静風または暴風と号して，盛んに『中学文壇』，『新文体』，『秀歳文壇』などに投稿した文学青年だった。彼には，爆弾製造の疑いが掛かった。そして当局の尾行をうけた。大正7年，並木凡平（2代目）というペン

（4）越崎はついで，「クラルテ」をあげている。つまり多喜二編集の雑誌である。しかし『クラルテ』に高田は書いていない。

ネームで，初めて『小樽北門日報』（今の小樽駅前北交ハイヤーの処）に口語歌を発表した。それ以来，新歌壇のために苦労し，精進した。彼の全盛時代は，『小樽新聞』の社会部長(5)だった時だった。高砂町勝納河畔に住んでいたころである。彼が全責任をもって編集していた同紙夕刊社会面の面白さは，読者の評判だった。若手記者の集めて来る素材も，一度凡平の筆が入ると，まるで打って変わって血の通った社会記事になったという。記事のキャッチフレーズも独得な味があり，それが驚くほど素早く，しかも肺腑を貫く鋭さがあった。

夕刊の口語歌選者は，凡平だった。また日曜日付けの一頁をさいて日曜文芸特集とし，一般素人にとって唯一の作品発展の場であり，かつ当時の一流作家の作品もかなりここに集まった。作は，エッセイ，コント，詩，短歌，随想などであった。広い意味で，凡平は北海道文学の育ての親であった。（「並木凡平の横顔」野村保之）

彼は酒好きで，オミキノンベエという愛称をもらった。そして貧乏だった。借金取りがくると，押入れの中に隠れて居留守を使う。ある時，預り子チツ子ちゃんが，「お父ちゃん押入の中にいるわ」と，正直にしゃべってしまった。ヒヤットした凡平の耳に入ったのは「いい子じゃねえ，さようなら」と云って帰っていく，粋な借金取りの足音だった。

彼はチツ子を詠んだものがある。

十日ほど来ないチッ子を気にかけておもちゃの汽車を走らせてみる

家賃を一カ年以上ためて立ち退き談判をうけたとき，こう詠んだ。

月々に払う家賃が貯金ならこんな貧乏しないなあー？

彼は愛妻家だった。だから妻をうたったものが多い。

（5）明治41年2月まで，碧川が社会部長であった。

妻ねてる枕の下のがまぐちをそっと調べて暗い気がした
貧しさに馴れて十年嫁入りの妻の晴着は人の手にある

小田観蛍は，凡平のことを「すこしの虚構もまじえぬ言動，子どものような大人」という。凡平はお人善しであった。昭和12年11月に『小樽新聞』の経営陣が変わって，18年勤続した社会部長凡平は首になった。昭和14年，彼は『室蘭日報』の編集次長となり，昭和16年，そこで亡くなった。歌集は，『赤土の丘』(小樽青空社　昭和8年)がある(越崎)。彼の有名で，歌碑になった歌は，これである。

廃船のマストにけふも浜がらす　鳴いて日暮れる張碓の浜

16　文学

多喜二は，徐々に絵筆を捨てて，文学の道に進むが，水彩画を伯父に「禁止」される以前から，すでに文学に関わっていた。

庁商時代に多喜二が住んでいた伯父の家と片岡の家とは，徒歩で7～8分のところであったので，2人はきわめて親密に往復した。文学少年としての交友が続いた。絵，短歌，小説をともにものした。片岡は言う。「しかし，多喜二は，その頃から，私などに比し遥かに真剣味があったように思う。」(6)

多喜二はずいぶん本を読んでいた。庁商では嶋田正策の学校時代に，徳富芦花の『自然と人生』などを［教科書に］載せていた。多喜二は芦花もよく読んでいた。『みみずのたわごと』『思い出の記』『黒潮』を，みな読んでいて，嶋田はびっくりした。彼は後に言う。「あれも彼の態度の一つだな。一人の作家を読みだしたら　その人のものを全部読んでしまう。」(7)

同級生石本氏は，3年生のころ，つまり本科1年であるが，多喜二と親し

(6)「少年の日の多喜二」(『緑丘』通巻No.四十二号) 15ページ
(7)『北方文芸』1968年3月

くなった。氏は書いている。多喜二は「すでに文学に親しみ，……谷崎潤一郎，里見弴，芥川龍之介，夏目漱石，菊池寛，ツルゲーネフ，ドストエフスキー，チェーホフ，シェークスピア，そのほか数々を読んでいて，驚くばかりで，勉強の合間によくそんなに読む時間があるものだと驚いた。読むだけでなく，読後感，批評，その小説のポイントなどを話してくれる。自然と，多喜二の友人は，当時文学青年といわれるような連中，片岡亮一，斎藤次郎[8]，渡辺善之助などであった」。

多喜二は本科2年の時に，校友会誌『尊商』の編集委員に選ばれ，これを中心に彼の活躍が始まる。

この年多喜二は，月一度の庁商短歌会に出席している。この短歌会は，色内町の千秋庵（菓子舗）の2階で行われた。彼は当時，啄木を愛読していた。多喜二は詩も作っており，『文章世界』，『中央文学』で，選外佳作になった。

嶋田は，この庁商有志による短歌会に出たことがある。多喜二や片岡亮一も一緒であり，その時詠んだ歌が縁になって，嶋田は多喜二に連れられて，色内町の安田銀行の近くの蒔田の家を尋ねた事がある。花園町の一六銀行で柿本という人の所や，緑町で，短歌の会が催され，多喜二と2人でいつも夜出席した。その頃の歌は，多喜二も嶋田も石川啄木張りだった。片岡は当時市販の『短歌辞典』を使って，繊細な感じを出す歌を詠んでいた。

多喜二は，庁商第2期入学の小野寺末吉の影響を受けて文学に入った，とも言われる。だが蒔田栄一は語る，「小林多喜二などは，渡辺卓という先生から文芸趣味の影響を受けた一人である」。この先生の影響が大きいようである。蒔田はまた書く。「小林多喜二が文学を志すにいたったことに関しては渡辺卓という国語の先生の影響力を考えないわけにはいかない」。

校友会誌『尊商』は，大正6年12月に創刊号が出た。それは多喜二が予科2年の時であった。「発刊にあたりて」で，渡辺卓教諭が書いている。――実業に従事する多くは文芸に理解がない。こういう人と対座するといかにも殺

（8）斎藤，百十三銀行に就職。

風景である。ただ利欲だけを求めている。その心が顔にも表われて卑しくみえる。それに反して，趣味を持つ人は肌ざわりよく精神高尚である。両者は天と地の差がある。実業界に雄飛しようという諸君よ，前者にならないよう願う。——

一方多喜二は，「編輯余感」(9) で書いている。「……いくら商業学校だとて余りと思われる程本校生徒がこうした芸術方面に無関心であると。あまりに『商人根性』的であると。……情けないことである。悲しい」。彼のこの考えは，渡辺卓と殆ど全く同じである。これは渡辺の影響であることも考えられる。

蒔田は書く，「この先生はよく綴り方を書かせ，一度『健康の必要』という題で書かせた時，……小林は会話の形で書いた。私は渡辺先生がそれをとりあげて読むのを聞いて大いに感心し，それで彼と仲よくなり，『尊商』の編集なども一緒にやるようになったのである。」

渡辺卓先生について，手塚は，漢文の先生だとしている。しかし石本氏によると，漢文は学校では少ししか教わらなかった。したがって渡辺先生は，国語の教師だったのではないか。また学校では，江戸時代の少し前の時代の中古文を教わった。『源氏物語』などの平安朝文学は教わっていない(10)。

商業科の授業は，本科すなわち3年目から教えられたので，予科は普通科が中心であった。この学科目については，すでに紹介したが，多喜二は主に予科時代に渡辺先生に教わったことになる。

越崎宗一は，多喜二の2級上であった。同じように庁商・高商と進んだ。彼によると，多喜二は片岡亮一，坪田豊太(11)，西岡徳蔵(12) などと共に，文学グループを作り，時々集まっていた。坪田に誘われて，越崎は何度かその会に出たことがある。その集まりでは多喜二は若い方だったが，こと文学に及

(9)『尊商』第4号の編集後記
(10) 石本氏インタビュー
(11) 坪田豊太，一橋卒業後，三菱鉱業入社。
(12) 西岡徳蔵，緑陵教諭になる。

ぶや，仲々負けていず，熱弁を振った[13]。

彼はこうも書いている。越崎は「実業学校に籍は置いていたが，一時は私も文学かぶれをしたものだ。二級下に小林多喜二がいて，……片岡君，坪田君，西岡君ら文学グループの集まりでは一緒になった。彼は大正六，七年の頃，秀才文壇その他の文学雑誌に，短編小説をよく投稿し，掲載された雑誌を持ってきて，得意然と見せびらかしていた。

また文学論で口論になっても，小林少年は一見識を有し仲々負けてはなかった。後に有名になる片鱗は既に持っていた。」[14]

17　学業

蒔田栄一は庁商で3年間，多喜二と同級生で，親友であった。彼は大連商業から転校してきて，庁商本科1年に入った。彼は書く。「小林は絵も描けば小説も詩も書くということで，クソ勉強はしなかった。それで五番くらいの成績を維持していた。」

学校では試験になると，誰もが徹夜で勉強し，試験前の10分間の休みも惜しく，ノートや教科書と首引きだが，多喜二はそんな時，教科書を開けることは全くなく，全然勉強しない。皆が勉強している間を，にこにこして教室を回っていた。

友達が「オイ，小林，ここを教えてくれ」というと，ていねいに教えてくれた。点数はいつも満点に近かった[15]。

彼は伯父のパン工場（小樽では一番大きかった）に寄宿[16]し，毎日遅くまで帳面の手伝いをしながら，よく勉強ができたなと，思われた。伯父の家では下級生のころは，もしかしたら働いていたかもしれないが，庁商で商業の

(13) 越崎「多喜二抄」（『緑丘』42，31ページ）
(14) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年　32－33ページ
(15) 石本
(16) 工場でなく，家である。

勉強をするようになって，つまり上級生になってからは，専ら帳面付けであった。月末には請求書かきで夜遅くまで仕事をして，学校にきた。仕事はしっかり終えた。責任感が強かった。

また短時間で必要なことを何の学科でも覚え込むことができた。非常に素晴らしい記憶力を持っていた(17)。平均点65点以上とらないと進級できない学校で，彼は最終学年では，平均点が85点というトップクラスの生徒であった。以上のような状況の中で，多喜二は卒業時に5番であった。

庁商は，スキーや剣道で全国的に有名であった。剣道は正課だった。剣道担任が早稲田出身の横溝という厳しい元気のよい先生で，剣道の時間が朝7時……冬などオーバーな云い方をすれば，暁の星をいただいて家を出ねばならなかった。庁商は伝統的に剣道が強く，中学校全国大会で優勝旗を津軽海峡を越えて持ってきたことがあった。

大正12年2月3日，庁商横スロープを中心として第一回全日本スキー選手権大会が開催され，スキー小樽を全国的に有名にしたが，その夜，不審火で庁商校舎は屋体を残して全焼した(18)。

だが，そこで全然スポーツをやらなかったのが，多喜二と蒔田であった。多喜二は絶えず何か書いていた。

同期生は大正10年に庁商を卒業したが，その年に高商へ入学したのはだだの3人だった。その理由は後で述べるが，多喜二と足立登と金井健四郎だった。そのうち，糞勉強をしないで合格したのは，多喜二だけだった(19)。同級生のうち十数名が，1年遅れて高商に入学することになる。

庁商時代の多喜二の親友は，片岡，一級上の島田，蒔田らである。ついで絵のグループ，短歌のグループという範囲の人々である。

庁商で，早稲田大学を出て歴史を教えた，浅山という教師がいた。その教

(17) 石本
(18) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年
(19)「多喜二と私」(20ページ)

師は，寄宿舎の舎監もやっていた。一度彼ににらまれたら大変という，評判の教師であった。しかも彼は授業中，「閻魔帳」を片手にして，色々と勉強上の質問をするのである。だから，ある日の後の方の授業を受ける生徒は，前の時間の授業の様子を知りたいわけである。

多喜二と同学年生でK.K.[19a]君という生徒がいた。K.K.君の組がその日の後の時間＝授業の時には，K.K.君は必ず，休憩時に隣組に出かけ，前の時間に浅山先生がどんな質問をしたかを偵察にくる。そこでその質問の要点を話してやると，K.K.君は喜んで出て行くが，もしそれを教えなければ，うるさく付きまとう。そこで相手もつい話してしまう。ところがその反対に，他の組の生徒が偵察にいくと，K.K.君は，「いや，大したことではない」と言って，絶対に内容は教えてくれない。これがK.K.君の常套手段であった[20]。

正義感の強かった多喜二は彼に嫌悪感を抱いたに違いないと，安宅氏は言う。

18　多喜二の家は貧しかったのか？

多喜二の思想についてはどうだろうか。蒔田栄一は語った。

「多喜二が左傾したのは，家が貧しくなって，伯父のパン屋で働かねばならなくなったことと関係している。」「彼の左傾は先生や学校の雰囲気からしからしめたものではなく，家庭環境によるものだったようだ」。

片岡亮一も言う。「学校時代の多喜二の生活は物心共に決してめぐまれたものではなかった。彼の小説がプロレタリア文学に走ったのも故なしとしないわけである。」[21]

この説は後で検討するつもりである。一面では正しいが，そればかりとも

(19a) 実名は分かっているが，ここでは差し当り，出さない。
(20) 安宅氏
(21)『緑丘』通巻42号から

言えない。また，すでに読者は知っているように，蒔田が言うように，家が貧しくなったから伯父のパン屋で働かねばならなくなった，のでもない。庁商へ通う代わりである。

庁商で，彼の側に座っていたクラスの者の話によると，その同級生が，「俺は共産主義者ではないが，共産主義の考え方にも好感の持てるところもある」と言ったところ，それ以来，無口な多喜二が親しく声を掛けてきた，という(22)。この話を批判的に吟味しよう。

多喜二は，庁商の時代に左傾していたわけではない。もちろん，共産主義者ではないし，共産主義も深く知っていない時代である。習作の小説の中で，それらしい発言はあるが，少年の人道主義的発言である。家が貧しいことも，左傾する一つの理由とはなるが，全てではない。

多喜二が共産主義者になったのは，ずっと遅く，高商を卒業して2，3年後である。それも共産党員になったわけでもない。そして高商時代でも進歩的な考えを持っていただけであって，まだマルクス主義もよく分かっていないのである。だから，庁商時代にはなおさら，また全く「主義者」ではない。

そのため，ここで紹介した彼の同級生の話は，矛盾しているのである。その同級生が喋ったことは事実であろう。そしてそれ以来多喜二がそうしてきたことも事実であろう。ところがそこには，内容的には主義とは全く関連がない。そしてまたありえない。つまり，共産主義が分からない多喜二がそんな話を聞いたとしても，それが理由で親しくなることはない。恐らく他の理由で親しく話し掛けてきたのであろう。

これは人間の記憶の奇妙な作用の一例である。この同級生は，後にこの思い出を語ったのであろうが，この当時の多喜二と，後に有名になった多喜二とを，二重写しにしてしまっている。後年の多喜二を若い多喜二に重ね合わせてしまった。結論的に言えば，カン違いである。この同級生は，それを後年になって関係つけたのである。勿論それを語った人には悪意も意図も何も

(22)『緑陵五十年史』

なかったであろう。人間の記憶はそのような作用をするものである。

巷間いわれているように，多喜二の家は貧しかったのだろうか？　実はそれほどでもない。

弟・三吾さんは，「白いシャツを着たことはなかったです。」と語る。近所の福原さんか，水産学校[23]長の先生宅からか，お下がりを貰ったそうである。三吾さんは云う，子供時代には，「一度白いシャツを着て見たいと思っていました。」

家は相変わらず，伯父のパン工場の支店としての形のパン屋であった。三吾さんは語る。「パン屋といっても，おやじが朝早くに出来たてのアンパンやミソパンを仕入れてきて，それを店に並べるだけで，家で作るのは大福もちとまんじゅうでした。

でも周辺は漁師，労務者など貧しい人が多く，代用パンやアンパンはよく売れたけど，食パンを買う人は珍しかった。それで女学校に行っていた姉も，学校から帰ると豆撰工場に働き，おやじもパンやもちを入れた折り箱をかついで行商していました。」[24]

筆者が三吾氏に，小林家は貧しくなかったはずだと云うと，「そうですかね

---

(23) 庁立水産学校は，明治38年4月に札幌に創設された。明治40年2月に小樽若竹町に移って庁立小樽水産学校となった。北海道では，甲種実業学校としては，明治16年の函館商船学校，明治19年の函館商業学校についで，第3番目である。初代校長和田健三は，着任半年で樺太民政署へ転出した。教頭藤村信吉が第2代校長となり，約1年で道水産試験場に転じた。第3代校長に中尾節蔵が来た。明治40年に藤村がふたたび戻って第4代校長となった。彼は約20年在職し，昭和2年までいた。従って，多喜二一家がよくお世話になった水産学校長というのは，この藤村先生にちがいない。

歴代校長は札幌農大出身で，クラーク以来の伝統クリスチャンで立派な人格の教育者であった。藤村は道庁から欧米に派遣され新知識を吸収して，帰国し，鮭鱒孵化事業として有名な千歳孵化場の創立者として，北海道水産業の大功労者であった。

当初水産学校は，小学校高等科を卒業して入学する4年制で，大正13年に5年制に改められた。大正4，5年のころ，全校生徒が90名余と減少し，廃校問題が起きたことがある。生徒には地方の漁師の息子が多かった。

(24)「語る人　小林三吾さん」1．『朝日新聞』小樽版　1977年4月19日

え」と否定的である。三吾夫人は，「小林家は貧しくなかった」と云う。しかし本人の発言をとりあげるべきだろう。

近所に住んでいた二木さんは，小林家が貧しいという雰囲気はなかった，そして母のセキさんはいつも小さっぱりした着物を着ていた，着物はよごれたり，すれたりは一切なかった，と云う。家には小作米が秋田から送られてきた(25)。

もちろん筆者は，小林家が裕福であったと，主張するのではない。そして，また裕福ではない。しかし，本当に貧しかったら，チマ，多喜二，ツギ，幸の4人を，中等学校へはあげられない。3人の姉妹は高等女学校に通っているのである。子供たちが伯父の援助で進学したとはいえ，本当に貧しかったら，小学校を卒業してから働いてもらうだろう。

三吾さんが，貧しかったという意味のことを云うが，それは当人の実感だろう。実際は少なくとも当時の普通の日本人と同じ程度の生活状態だったのである。

問題は，多喜二自身が小説の中で，読者がどうしても多喜二の家だと想定してしまうような家庭を，貧しいものとして描いていることである。これで，一種の伝説ができあがってしまった。つまりフィクションがノン・フィクションとなってしまったのである。

---

(25) 多喜二の秋田時代について寸言。多喜二は秋田で，「多喜郎のオンジ」と云われていた。多喜郎は，多喜二のよきお守役をしたり，小川へよく魚釣りにつれていった。多喜郎は小学校の時から成績もよく，特に習字が上手であったそうだ。

伯父慶義は秋田で宿屋を営んでいた。母セキは語った。嫁にきた「川口のことはとても忘れない。夜のうちに野菜を家に持ってきて，そろえて，それを朝早く大館の朝市に売りに行ったものだ。夜が明けきらないうちに行くので長瀞のところがとってもこわかったものだ。」

伯父が渡道後，宿屋だった広い家を，沢口小学校から転任してきた安部弥吉校長夫妻に玄関付きの前半分を貸し，うしろの方に多喜二一家が住んだことがある。安部は川口小学校に15年勤めた。多喜郎の学校の校長先生であったろう。名校長で，生徒や村民を子供の如く愛したと，云われる。(小林三知雄「小林多喜二のことども」昭和48年2月20日)

19　庁商時代の作品

多喜二の庁商時代の作品を幾つか紹介しよう。

詩「秋の夜の星」「秋が来た」を，庁商校友会雑誌『尊商』第3号，大正9年3月，に出した。これらは「純真な少年の自然に対する感傷である。」(26)

彼は詩を書いていた。「北海道の冬」(27) という少し長い詩では，後年の小説を思わせる情景描写がある。

次の詩(28) は，彼が本科3年の時に，『中央文学』(1920年6月)に入選したもので，「雪解けの滴のように愛すべき詩」(三木露風) と言われたものである。

春

灰色のカーテンが薄ずれて
甘いミルクの光が流れ込む。
窓際の葉ずれ，ピアノのかそかな独言。
ぽたり／＼と落ちる
雪解けの滴に，
薄絹の春がしのび足に，
窓から覗いた。

その他2編も中央の雑誌に発表された。彼の残された詩は少ない。だが，これだけの詩を書けるので，発表されたもの以外の，それ以上の多くの習作が何倍もあったはずである。だが彼は詩人の道を行かなかった。

短歌も沢山詠んだはずであるが，十数首だけ残されている。友人たちとの

(26) 越崎　33ページ
(27)『小林多喜二全集』(以下，『全集』と略す) 第6巻　365-7ページ
(28)『全集』第6巻　368ページ

合評会で最高点を取った歌は次である。

焼印の押したる下駄を穿きたりし昔のわれのいとおしきかな

これは啄木流である。あるいは啄木の真似である。多喜二は少年時代から啄木の短歌を好んでいた[29]。多喜二「らしい」作は次である。

寝ぬる間のみ貧苦を忘ると就床にける老いにし父を涙ぐみて見る[30]

さて散文について言えば，庁商の校友会誌『尊商』1917年12月第1号に，「今は昔」という小品が発表された。平家の物語を文語で書いた作文である。14歳としては非常にうまい文章である。庁商では平安時代の文学を教わらなかったというから，自分の読書知識を利用して描いたものであろう。

以上の分野で彼は，特に傾向的な，つまりプロレタリア的，社会主義的なものを書いていない。ごく普通のものである。これは当然である。なにしろこの時代には，多喜二は社会主義の立場に立っていない。だから傾向的なものを書くはずがないし，まだその時期ではないのである。少なくてもそれらを書くのは，高商卒業以降である。短歌には一首だけ，前出の「多喜二らしい」ものがある。しかしこのくらいの傾向的なものは誰でも書くであろう。

初めての小説は，「呪われた人」[31]で，『尊商』1919年3月発行第2号に載った。彼が本科1年の時である。これは，彼の文学的出発点がすでに原型のようにある[32]と言われている作品である。

この小説の主人公は，15歳の時から火山灰会社に通っていた。彼は肺病（今

(29) 碓田のぼる，全集月報　6，3ページ
(30)『全集』第6巻　378ページ
(31)『全集』第6巻　381-4ページ
(32) 小林茂夫「初期作品の概観」（『小林多喜二読本』27ページ）

でいう肺結核）になった。彼は，ふと，親を恨む。父が火山灰会社に自分をやったからだ。しかしすぐ，それを打ち消す。やはり仕方がないんだ，家の生活は苦しいのだ，と。彼は苦悩する。自分が働かないでは，一家が生活して行けない。この不治の病をなおすために金を借りなければならない。その間，働かないでその金を使わざるをえない。彼は自殺をしようとする。不治の病だし，金を借りるだけ損である。彼は海岸へ行き，断崖の上に立つ。そういう内容である。

さてこの作品は，多喜二の生活をデフォルメ（変形）したものである。当時多喜二の家の向いは，海から見て左に熊臼のトンネルを抱える崖が続いていて，その下に火山灰層があり，それを精製する会社があった。彼の姉チマは火山灰会社に働きに行ったことがある。家は貧乏な生活である。小説の主人公は高等小学校に上げてもらっていた。実際の多喜二は2年でなく5年の商業学校に上げて貰っていた，という違いはある。多喜二が肺病になったら，この主人公と似た状況に陥るであろう。

この小説の内容は，生活苦・貧困と病気をテーマにしている。この問題は，もちろんもっと広い視野でとりあげるのであるが，後年の多喜二のテーマとなるのだった。それゆえこの小説は，文学者としての彼の行路にとって暗示・予言的であり，出発を指し示している。

この小説は，私小説ではないが，私小説的である。彼の実生活にフィクションを入れたのもであり，彼の家族の生活が色濃く出ており，またそれが基盤となっている。彼は，姉のチマさんが働いた火山灰会社の粉塵で肺病が出ることを，姉から知った(33)。そしてこれを書いたのだった。

一般に日本の小説は私小説が少なくない。多喜二の文学を分類するのは難しいが，仮に，私小説的小説と社会的事件を扱った小説との二つに分類すると，有名な作品，「一九二八年三月十五日」「蟹工船」「不在地主」「工場細胞」は皆，後者である。私小説的作品の代表は，「独房」「党生活者」である。ま

(33) 田中孝氏手紙より

たは「転形期の人々」をあげることができる。

そして初期の短編小説は，殆ど私小説である。彼は，自分の生活あるいは周囲の事件を取り上げて，小説にするのであった。彼はいつもメモをもっていて，友人の話や身辺の事件を記録していた。それを自然主義的に描くのである。彼の私小説的でない小説が代表的作品となってしまうのも，皮肉である。

さて彼は，小説「病院の窓」(34) を『尊商』1920年3月に掲載した。「足を傷つけて学校から病院に運ばれた私（多喜二自身であろう）が松葉杖をかりて室内を歩けるようになり」(35)，病院の窓からO町，つまり小樽を眺めて，「私」が思うことを綴ったもので，小説としてはほとんど取り上げる価値はない。しかしこう書いていることは注意してよい。

「この華やかな都をシンボル化している燈……その燈の後にはそうしたものに比例した濃い陰影がある。そして富者，征服者の狂う歓楽を眺むる人に想像のつかない生活難の叫び，社会敗残者の呻がある……ということを」。越崎は，「世の矛盾を痛感した彼は，既にプロ作家の萌芽を見せている。」と見る(36)。ただし，この評価は大袈裟である。

庁商時代の小説としては，以上の2つ以外に，「電灯の下で」「石と砂」「真夏の病院」「トランプ」「駄菓子屋」「晩春の新開地」がある。

小説「駄菓子屋」(37) は，本科3年の時，小樽中学生が主になった同人雑誌『群像』に投稿し，載らなかった作である。これを後に同人誌『クラルテ』（1924年）に載せた。この初めの投稿原稿が，その後どの程度手を加えられたか，または変化がなかったのかは，分からない。

それゆえ，「駄菓子屋」を除いて考えておこう。庁商時代で一番良い作品は，

(34)『全集』第6巻　384-8ページ
(35) 越崎，33ページ
(36) 同　33ページ
(37)『全集』第1巻　90-99ページ

「晩春の新開地」(38) である。『尊商』1921年3月，第4号に掲載されたもので，庁商卒業真近の作である。

O町，つまり小樽での話とされている。白痴の次郎が，5，6人の男の子にいじめられ，からかわれるストーリーである。彼らは次郎に南部せんべいを見せびらかして，じらしたり，母親が居なくなったと嘘をつき脅かして家にもどらせたり，次郎の帯を裂いて下駄の花緒にしたりした。ここで白痴の少年の描写がとてもうまい。白痴の少年に直接同情する立場で書いているわけではない。だが結局，彼の哀れさを描いている。そのため読者は彼に同情せざるをえないであろう。多喜二は，弱い者に温かい目を持っていた青年であったことが分かる。それに多喜二は子供を描くのがうまい。

彼は，恐らくこの「晩春の新開地」の発表によるものと思われるが，当時庁商で一番うまい書き手と見なされた。

「病院の窓」「夏の病院」は，同じ舞台である。足の骨を折り，入院した時である。この主人公も脚を折って入院している者である。「病院の窓」は，この時の記憶を情景にいれて書いたのであろう。(入院については，すでに述べた。)

「石と砂」は，伯父の家での居候の状態を描いており，部分的にはフィクションだが，彼の当時の生活が分かる。

興味あるのは，感想「霜夜の感想」(『尊商』第4号　1921年3月発行，所収)である。この感想の冒頭では，宇宙の神秘を人々は解決出来ないで来た，と述べながら，彼は三つの重要問題を出し，それを考えている。

第一。「我等は何んの為に生れてきた」という問題さえ確然としていない……，と彼は言う。ここで多喜二は，自分の考えを出す。「然し我等はある使命を帯びて生れて来たことは確かで」ある。「そして私達はそれをなすために第一生存していなければならない。その手段として働くのである。」

恐らく，全ての人間が人生に自分の使命を見いだそうとしているとは限ら

(38)『全集』第6巻　399-406ページ

ないであろう。しかし多喜二は，使命を帯びて生まれてきたと考える陣営に居るのであった。

第二。「愛の起源を考えて見ると……たゞ一言『利己』と言いたい。……然し私達はその『利己』を広い立場に於ける『利己』に標榜したい。その時にこそキリストの愛が得られるのであろう。……」ここで，「広い立場の利己」と言っているのに注目したい。

第三。小説を書き，または絵を描く時の態度について論じている。「模写をすることはその人がたゞ一つの道具に過ぎないということを証明している。」「一個の人間が自己のあらゆる個性を打ちすてゝ自己を没却し模写する時は」奴隷にさえ数段劣る。「……自ら腰を屈して自分を失うのは何んたる馬鹿気たことだろう。」

ここでは，画家・小説家が対象を単に模写することを，痛烈に非難している。これは現代的思想である。そして個性を出さねばならないことを説いている。もちろん彼は，模写の意義を知っていながら書いている。「然し人は常にある模写の階級［段階という意味である——筆者］を通過しなければならぬ。」「……物の考え方，画をかく方法，文をかくこと，短歌でも」すべて「一つの形（伝統）によらないものはないのである。」(39)

多喜二のこの作品は，もちろん小説でも文芸でもない。彼の若き日の考え方が出ている。哲学的・思想的文章だと言える。彼はこの種の物をあまり書いていないので，これは珍しいし，我々にとっては大切なものである。そしてこれは，やはり多喜二らしい真面目な，しかし青年らしい立派な思想である。

２つ目の興味あるものは，「編輯余感」(40) である。同じく『尊商』の同じ号に載った。彼が庁商の最後となる号である。この校内誌の委員であった多喜二は，編集を工夫してきた。そして最終的にこう呼びかける。「ともかく本校

(39)『全集』第６巻，543-546ページ。
(40) 同，547-8ページ

生徒一緒になってこの『尊商』を育み上げそしてうるわしい芸術の花園をつくって見たいものだ。」そう，多喜二は芸術家の卵なのだ。

小説のうまい書き手として，小樽中学にも多喜二の存在が知られたという。しかしこれは，どれほど当てになるかは疑問である。彼は小説を『尊商』に出した程度であり，よほど文学と『尊商』に関心を持つ小樽中学生でないと分からないのではないか。ただし小説以外での投書家としての存在は知られていた。また小樽中学関係の雑誌『群像』に，小説「駄菓子屋」を応募して，これは掲載されなかったが，それがきっかけで話題になったことはありうる。

さてハイ・ティーンで，彼くらいの水準の小説を書ける者は，全国におびただしく居たであろう。彼は，短歌・詩・水彩画に傾注していたし，文学作品は沢山読んだが，創作に本腰を入れるのは庁商時代の終りであった。日本文学史上現れる天才的少年作家と比較すれば，彼はこの時期では，質・量とも劣るのである。しかし，これ以降の文学修業が眼を見張るものであり，高商を卒業して拓銀に勤めてから，一流文学者としての力を表すことになった。その数年間の彼の進歩の速さが驚異的なのである。

多喜二は自分で「生まれ出ずる子ら」という自家製ノートを作った。庁商時代である。その「一」に，「真夏の病院」(1920年10月)[41]と「トランプ」(1921年2月)[42]を書いた。「真夏の病院」では，すでに文章がしっかりしている。だが内容は，短いので，大したことがない。なお当時評判になった素木（しらき）しず子の小説が少し出て来る。だから島田の言うことも正しいだろう（既述)。これは多喜二の病院での経験を入れている。「トランプ」も習作である。この「生まれ出ずる子ら」を，友人に回覧して，感想を貰っていた。

(41) 同，408-413ページ
(42) 同，414-417ページ

20　帽子の白線

伊藤整は，『若い詩人の肖像』で，こう書いている。

「多喜二は高商に合格し，それまでの白線三本の商業学校の帽子ではなく，蛇腹を巻いた矩形の徽章のついた高商の帽子をかぶることになった。」(43) 庁商では，帽章として帽子に3本の白線をつけている。ただし小林の在学中は白線を用いず，卒業後に用いられたのであった(44)。というわけで，整は，多喜二が白線3本帽を被っていたように書いているが，実際は違うのである。整のフィクションであろう。

庁商の校訓は創立時から，

「一．四恩を感謝すべし

二．至誠勤勉を旨とし，各自の本文を尽くすべし，

三．運動を励み身体を鍛錬すべし」

というものであって，黒沼校長の発意と考えられ，彼は特に第一項を重んじた。ちなみに，帽子の白線3本のうち中央の太い白線は，第一項の「四恩の感謝」を示す。

この四恩は，仏教上の言葉であるが，黒沼校長は訓示では，仏教上の言葉であるとは言わなかったし，仏教上どう解釈するかということは詳しく話さなかったらしい。安宅文夫先生の調べでは(45)，四恩は，弘法大師の講話の中にあり，一　父母の恩，二　国王の恩，三　衆生の恩，四　三宝（仏・法・僧）の恩，として弘法は教えた。黒沼も，「諸恩」の意味として訓示したようである。

なお，小林と同期の庁商生の会は，「四葉会」と名付けており，「四恩」と

---

(43) 新潮文庫，23ページ
(44) 安宅文夫先生の手紙，1987．5．9。
(45) 安宅氏は，多喜二と同年に庁商に入学し，彼とは親しくはなかったが，5年間同じく通学したクラス・メートである。多喜二に1年遅れて高商に入った。後に庁商の先生をされた。

はしなかった。幸福のシンボル，四葉のクローバーを意味するものである。

21　投稿「駄菓子屋」が没になったわけ

大正9年，多喜二が庁商本科3年（つまり5年生）の時，小樽で『群像』が創刊された。創刊当時の同人のメンバーは，殆ど庁立小樽中学の在学生と卒業生で固められていた。その同人の1人は，当時小樽中学5年の武田暹であった。

武田暹（すすむ　1901-1981）は，1901年4月，札幌に生まれた。その父は山県県出身であった。そして小樽に転居した。武田は，花園尋常小学校へ入学した。ここは，小樽中，小樽高商へとつながる名門校であった(46)。しかし本人は，とにかく中学校に進みたくなかったのだった。そこで当時稲穂小学校に併設されていた高等小学校に進んだ。しかし，その後は小樽中学に進学した。

武田が中学を卒業する前年（1920年）の11月，同校を中心とする文学青年たちによって，文芸総合雑誌『群像』が創刊された。武田もこの仕事に当初から積極的にかかわり，小説部門の選考などにあたっていた。

『群像』の創刊号に先立って，投稿がかなりあった。地元紙に投稿を募る広告を出したからでもあった。これは同人組織＝群像社であったが，同人誌という枠にとどまらず，文芸各部門にわたって投稿を広く募った。だからかなり広い読者がいた。

投稿の中に，小林の応募作「駄菓子屋」があった。小説の撰をしていた武田の第一印象は，不思議だ，ということだった。大体，中学派の雑誌に商業学校の生徒が原稿を送るなどというのは，彼らの常識では考えられなかった。武田は，小林の性格のうちには，一貫して，学校のような閥的なものにとらわれない，悪く言えば無頓着な，よく言えば純粋のものがあるのではなかろうか，と思った。だが武田はこれを没にした。

---

(46)『中津川俊六全集』278ページ

武田は後に語る。「小林がぼくらのはじめた『群像』——小樽中学内，群像社あてに投稿してきた。当時は全然知らなかったわけですし，読んで見たら，まあ，やはりちょっと古いなぁという感じもしたし，それよりも，グループとして樽中一本でいこう，他校の生徒のはとらない方針でしたし。だから作品がまずいからというのではなくて，よい作品でも保留に，という考えがあった。」(47)

武田は書いている。「小樽中学の付近に三ッ星という屋号のパン屋があったが，その店に庁立小樽商業学校へ通っている生徒がいて，学校の行きかえりに，よく往来で会っていた。その生徒が大きなカバンを肩からかけ，剣道の道具をかついでいると，からだがかくれてしまうほどに小柄な，皮膚の白い美少年で，制服の襟章をみるとたしかに五年生だが，せいぜい二年か三年生くらいにしか見えなかった。」(48)

まだ『群像』の第1号が出ないころのある日，その同人のSが往来で武田に，その美少年の方をあごで指し示していった。

「あれが『駄菓子屋』を投稿した小林多喜二だよ」。

「あれが小林だ？……ウソをいえ」

武田のその時の驚きは大きかった。5年生には違いないが，あんな子供みたいな男に小説などが書けるはずがない，ウソだ，信じられない，と思った。彼は，作品から受けた感銘と作者の印象とのあいだに大きなギャップがあるのにびっくりした。

武田は家に帰り，「駄菓子屋」の原稿を読みかえしてみた。ちっともケレンというものがない。心憎いばかりに落ち着いた筆致で描いている。この境地は2年や3年の短い小説勉強では決して生まれてくるものではないことを，彼はいやでも認めざるをえなかった。そして敗北感にうちのめされた。好き

(47)『北方文芸』1968年3月　52ページ
(48) 武田「回想の小林多喜二」(『小林多喜二研究』解放社，または復刻日本図書センター)

な作品ではなかったけれど，小林の小説にはかなわない，と思った。自分たちの雑誌に小林のものをのせる勇気や雅量が持てなかった。そういうわけで，「駄菓子屋」が『群像』から閉めだしをくらったのは，作品そのものがまずいからではなかった……率直にいえば，競争心理がはたらいたからであった。

武田は，「小林の作品は古いね，自然主義的作品だよ。」といって，彼の作品を一蹴した。

その後，小林が武田のことを，こういって方々へまきちらしているのを，武田は友人から間接に聞いた。「おれの小説を没書にするくらいだから，『群像』の武田はよほどえらいやつにちがいない」。

没書にされた腹いせに，変な皮肉をいっているなと，武田は思った。しかし，3～4年後に武田は多喜二と交遊するようになって，多喜二が決して腹いせに変な皮肉を言うような男でない，ということが分かるのであった。

さて『群像』は，大月源二や木田金次郎らが表紙絵を描き，途中から後援会員として宇野千代，小林多喜二などが名を連ねた。3年半の間に8号まで出て，終巻となった。だが多喜二はもう『群像』に投稿していない。

武田は，その後の筆名が中津川俊六である。小樽中学を出て，北大図書館へ臨時雇いとして勤め，まもなく常雇となった。2年後には島木健作(49)も雇員となった。武田は大正13年に，北大図書館から小樽市立図書館へきた。1924年に小樽市立図書館は，建物も完成し，3月には初代館長として河野常吉を迎えた。その館長河野常吉に武田はスカウトされたのである。河野は当時，北海道史の権威者であった。文久2年生まれで，長野出身である。松本師範を卒業し，福島学校長になった。その後，慶応義塾で学んだ。鉱山，新聞，県庁，中央気象台などを歴任した。明治27年に北海道に渡り，道庁嘱託となり，大正4年に道史編纂主任となった。辞職後，小樽市立図書館長となり，市史編纂をする。その後，室蘭市史編纂もした。

さて図書館の中に和室があって，武田はそこに寝泊まりしていた。夜にな

(49) 後に小説家。

ると文学仲間がおしかけて賑やかに議論をしていた。つまり多喜二ら『クラルテ』の連中である。昭和8年，武田は小樽で古本屋を開いた。戦後，北大図書館事務長となる(50)。

22　小樽図書館

多喜二が庁商時代に，徒歩で通学する路の途中に，小樽図書館があった。これを多喜二はよく利用したという伝説がある。

今の市立図書館と同じ場所に，旧図書館があった。現在の図書館が立てられるときに壊された。木造で青緑色のペンキで塗られていた。しかしこれは大正12年11月の建立である。つまり多喜二が高商三年生の時である。それ以前は，区役所の中に図書館分室としてあった。この図書室から彼はよく本を借りたのではないか。後に，ここに武田が勤めるようになる。

小樽図書館の歴史は，次のようである。

大正5年8月に，区立小樽図書館として創立した。おそらく分室としてあったのだろう。

大正6年8月に小樽区役所——もちろん今の市役所旧館（昭和8年建築）の建物ではない——内に，図書館として作られた。

大正11年8月に，小樽区が市になったので，名称が小樽市立図書館となる。

大正12年11月に（旧木造の）図書館が建立された。その後，石造書庫が完成した(51)。

全国の図書館は，大正元年の541から同15年の4337へ増えた。だが蔵書数は305万冊から762万冊に増えただけだった。

23　校長排斥運動

庁商の校長黒沼義介は，大正9年(1920年) 2月28日，多喜二が本科2年

(50)「小樽時代の武田さん」『北方文芸』168
(51) 一部，小樽図書館からの聞き取り。(同図書館に感謝している)

が終ろうとする時，退任した。3月3日に校長の告別式が行われた。その後，大山校長が4月から8月まで勤め，松村昭敏校長が9月から就任した。随分めまぐるしい。

この年に多くの教員が庁商から転出した。黒沼校長と一緒に同じ秋田商業学校に行った人もいれば，その他の学校へ赴任した人もいる。なんと，3月に1名，4月に2名，5月に2名，7月1名，8月に3名，9月1名という大量転出あるいは辞任であった。

その間，前述のように校長が2人転出している有様である。松村校長の着任後も教員の転出が続いた。そのため，多喜二の卒業式（1921年3月）に，第4期総代秋田政治は，「学校を去るに当り，後輩のために先生方の安定と充実をお願い申し上げる」と言ったほどである。

学校長勤務年数表にはこうある。

「創立以来の学校長の勤務年数左の如し。

自 大正2年4月1日			
至 大正9年2月28日	6年11カ月		黒沼義介（岩手県）
自 大正9年4月21日			
至 大正9年8月30日	4カ月		大山登（兵庫県）
自 大正9年8月31日			
至 大正12年1月23日	2年4カ月		松村明敏（栃木県）
自 大正12年1月23日			
至 大正12年2月27日	1カ月	学校長事務取扱	山口末一（北海道）
自 大正12年2月27日			
至 昭和2年6月11日	4年3カ月		大山登」[52]

この交代の早さは随分奇妙である。

大正10年の卒業式の頃から学校騒動（ストライキ）が始まった。転退職の

(52) 田中孝『北海道庁立小樽商業学校史 —— 史料と体験の歴史』札幌・青玄社　昭和23年　123ページ

原因は教員の対立だ，という情報もひろがった。教員の転出があまりにも頻繁なので，在校生が刺激され，卒業生にも報告され，波紋が大きくなった，とも言われる。生徒は，新校長大山が創立以来の黒沼イズムを打破一掃しようとしたことに，反感を持っていたようだ，という見方もある。およそこの3つが，からまったようである。

授業も成り立たないことが多かった。校長と体操教師の排斥運動が始まった。この体操教師は，教え方が一部生徒に反感を持たれたからである。そしてこれは，夏まで続いて，ようやく収まった。松村校長は，大正12年に退任している(53)。

この問題について，手塚は，黒沼を自由主義，松村を保守主義とし，新校長が意見の違う者を更迭しているように描いている(54)。それは物語としては面白いし，間違いではないであろうが，あまりにも一面的・断定的すぎる。

実際は，黒沼が勉強と体育を両立させようとしたのに，松村は勉学を中心にしようとした，とされる。それも，松村は授業が成り立たないので，勉学をしっかりさせようとした，という説もある。また，松村校長の以前にすでに転出者が続出しているのである。

校長排斥運動は，多喜二が庁商を卒業する頃から，高商1年の途中までの事件であった。だから彼は，これにはあまり関わらなかったかもしれないが，大いに情報は入ったであろう。なにしろ，庁商は高商への通学途上にあり，その下隣でもあるからである。

多喜二は，この学校騒動を題材にして，「断稿（その四）」(55)を書いている。小説の素材のような形式である。校長が代わることと，1人の教師が排斥運動を受け学校をやめるという筋だが，あまり要領を得ないストーリーである。この稿は，高商時代の作品であろう。

---

(53)［田中孝］『樽商六十年の歩み』，『緑陵五十年史』
(54) 手塚，上，59ページ
(55)『全集』第6巻　508-510ページ

校長の黒沼義介は，庁商から秋田商業の初代校長として転任したのが，大正9年3月である。次の大山登校長が着任したのは，同年4月である。大山は「わが輩は，北海道第一の商業学校に就任する」と豪語し，しかし，わずか4カ月で函館商業学校に転任してしまった。どうしてこんな事を，当時の道学務課が承認したのか，変な事だ，と安宅先生は回想する。

8月には松村明敏校長が着任した。両校長とも一橋大学（東京高商）の教員養成所の出身らしい。松村は大正12年2月に退任した。そして再び大山が函館から着任した。これもまことに変な人事だと，安宅先生は書く。

生徒としては，校長が次々に代わるし，職員も転出が多く，おちついて勉学ができない面もあり，さらに教員の中には「厳罰中心」のやり方で生徒を指導する者もあり，黒沼校長時代とは急に代わった雰囲気であった。

黒沼は，樽商の基礎を確立した名校長であり，校訓により四恩感謝を教え，「生徒はよいと思ったことは徹底的に実行すべきである」が，それが「あやまちである場合は直ちにそれを改むべきである」と教えた。しかも生徒として守るべき事は，当然に徹底的に守らねばならぬ，と教えた。講堂や校庭また修身科の教室での講義も，生徒の一人ひとりによく理解されたらしい。しかも当然なすべき事でも無用なものは使用しないという考え方なので，生徒にたいする制札，例えば「入室すべからず」「入るべからず」等の制札は全然用いなかった。また四恩にたいする「感謝行」の重要さを，修身その他で強調した。当然なすべき事では，敢えて形式を重んずる事は，排除した。その例として，職員の出勤について，多くの場合，校長室の入口の脇に「出勤簿」を置き，出勤の場合は校長室に入って，挨拶をし，出勤簿に捺印をするのが，習わしであった。だが黒沼時代には，出勤簿の備え付けはなく，出勤は当然のこととして，朝の挨拶は受けても，出勤簿への捺印は行わせず，欠勤の場合はその旨電話で通知する必要があると，強調した。従ってきわめて明るく，のびのびとした教育や指導であったらしい。

大山登は，名前通り，豪放さを自負した人物であり，修身科を担当しても自慢話が中心であった。さらに松村校長では，黒沼のような厳格の中にも生

徒の自由を尊重する気分がなく，ただただ型にはめようとする傾向があった。教師と生徒との愛情による親密感がなかったのではないか，と安宅先生は書く(56)。

いうまでもなく，騒動の始まりは，松村時代である。庁商の嘱託の先生でもあった稲垣は，日記でかく。「大正十年四月一三日，水，晴，午前七時庁商へ行って見ると職員は唯一人しか出ていない。時期が切迫して見なれた教員の顔が見えぬので，聞いてみると教員が七人他へ転任したということであった。これでは卒業生が騒いだのも道理である……ような感じがした。」

当時1年生の川村はいう。「教場で批判的なことを言う先生もいたし，先生の更迭もしきりであったので，生徒もじっとしてられなくなった観でもある。それで上級生の一団が校長室に押し掛けて行くようなこともありました。」

4月15日に新任式があり，稲垣は書く。「今まで交際なじみであった皆川氏も姿を見せぬ。富岡教諭も出てこない。だいぶえらい更迭である。しかし生徒の気持ちは非常に荒れて見える。……騒ぐ。新任教員の挨拶なども少しも徹底しなかった。」「四月一八日……庁商へ……出かけてみると，まだ教員は一人しか出ていない。始業の時間になっても西原教諭は見えない。第二時間に移る頃，子野日教諭は本科の生徒は皆帰るようだと言う。……予科二年の丙組へ行って見ると，生徒は十人ばかりしかいない。……皆帰りましたと云う。」この日「公園グラウンドへ集合すると宣言して，大部分の生徒はそれに向かって出かけたらしい。」

越崎（大正8年卒業）はいう。「松村校長時代のストライキの時は学校に」いなかったが，卒業生として狩出され，松村校長に会った。生徒は新校長が創立以来の黒沼イズムを打破しようとしたことに反感を持っていたようだ。「僕らが寿原重太郎さんへ善処方依頼に行った。……松村校長も，そう生徒が騒ぐほどわるい人とは思えませんでした。やはり感情問題があったのでしょ

(56) 安宅手紙

う。」

黒沼イズムとは，黒沼校長が学業と体育を平等にとりあげ，商業学校は大学進学の準備校ではなく，完成教育の場であるとした考え方である。しかし，たまたま松村校長が就任する前からの職員［＝教員］の転出にともない，学力低下があって，松村校長は就任後の訓辞の中で「運動に打ち込みすぎて学力低下してはならぬ。進学にも支障を来たすことは好ましくない」という意味のことを言った。それに対し，黒沼イズムを打破するものという声が寄宿舎の中に起こった，ともいう。

大正10年卒業式の秋田政治の答辞に関連して揉めて，それを寿原や泉大三郎が調停して，一応事が収まった。しかしその後も先生の転退職が絶えないので，在校生が卒業生に情報をし，事が再燃したのだった。

4月19日，稲垣は書く。「公園を通過すると，庁商の学生が大分いた。……騒動の首謀者が，」出席しようする生徒を押さえているように見えた。しかし小数は上級生の網をくぐって出席した。大部分は公園に集まって，自習した。この騒動は卒業生が主力となっていた。

この騒動は，初めは校長（大山）と体操教師との排斥運動で始まった。実は大正9年であって，多喜二在学の時代である。

さて新しい年度の騒動は4月18日から4月24日まで続き，25日に解決した。調停のために，佐野亮，中谷宇吉，古沢太季が力を尽くした。

この騒動の起こりは，職員間の対立のあつれきであったらしい。それは「黒沼校長の末期ころから校長派と対立する職員の一部が転退職して」いることがあった。松村校長としては，そういう派閥を解消すべく乗り出したが，それがまたあつれきとなって，黒沼校長を追慕する人たちの転退職を続出させた観もある。

騒動の最後の話し合いのとき，学校と父兄の集まりだけでは十分な了解が得られないとして，1期から4期までの卒業生が集まった。その時，父兄の一部には，生徒が学校批判をやるとは何事かという者もいたが，生徒の気持ちも了解できるということになり，処分の生徒を出さずにおさまった。この

騒動は，こうして職員，在校生，卒業生の三者が渦を巻いて展開したものだった。

7月に，従来の助成会でなく，父兄会が発足した。この父兄会設置を促したのは，小樽高商の渡辺龍聖校長だという(57)(58)。

24　鈴木　信

多喜二の庁商時代の1年後輩に鈴木信がいた。多喜二は彼から思想的影響を，後に受けるのだ。

鈴木信は，明治36年2月15日に余市町黒川村25番地に生まれた。余市高等小学校を出てから庁立小樽商業に入学した。はじめ寮にいたが，その後，自宅通学をした。文学には余り関心がなかったので，多喜二らのグループには加わらなかった。

鈴木信がマルクス主義にひかれたのは，4年生のころであり，河上肇の著作を読んだのがきっかけであった。学校の授業には左翼的なものはなかったが，前述のように，校長の黒沼がさかんに河上を紹介していた。

鈴木信は，河上の本や，『改造』，『解放』などの雑誌を通じて，マルクス主義に近ずき，学校の勉強は怠けた。鈴木信は，野球部に入ってショートをやった。

伊藤整は，書いている。……鈴木信は，小学校で川崎昇と同級生であった。小樽の商業学校で小林多喜二の一級下級生であった。彼は商業学校生徒の頃野球のショートで，その商業学校が……［小樽］中学校を野球で負かした時に大活躍した。また彼は商業学校の五年生の時ストライキの指導をして，その学校の校長を追い出した。彼の言葉の端々からすると，彼は明きらかに左

(57)『緑陵五十年史』
(58) これについて田中先生は私あてのメモで，年次からいって，渡辺でなく，伴房次郎第2代校長だと思う，とされるが，大正10年とすれば，渡辺であってよい。しかし越崎は，父兄会は大正12年にできたと言う。そうすると，もちろん伴校長である。その父兄会は，会長　山本厚三，副会長　佐野亮，理事　谷黒荘平，寿原重太郎，古沢太季。

翼的な思想を持っていた。同時に彼は野球選手という派手な存在であった。……鈴木信は何事にもよく気がつき，ユーモラスな挿話をいくつもつづけて話すという特技を持っていた。……

鈴木信は，小樽商業の時，校長排斥運動のリーダーになった。多喜二が卒業してから，新学期が始まると1週間の授業ボイコットなどが起きた。運動の途中から5年生の鈴木信がリーダーになった。松村明敏校長との交渉にあたった。校長は妥協して生徒の要求を受け入れたが，すぐに辞職したわけではなかった。この運動自体は左翼運動とは関係なかった。

鈴木信は，庁商を卒業し，高商に入学した。多喜二に1年遅れている。そして伊藤整と同じに高商に入った。野球は高商に進んでからもつづけ，東京で行われた全国高等専門学校大会にも2度出場した(59)。後年，実践運動に身を投じ，入獄する。

25　先生たち

職員名簿は，「必携」によると，次のようである(24から26ページ)。職名氏名　府県族籍　就職年月（大正年月），備考，の順で示す。

書　　記　吉田　貞助　福島県平民　大正2年3月，大正8年3月解職
教　　諭　石河初太郎　岐阜県平民　大正2年3月，大正5年11月解職
校　　長　黒沼　義介　岩手県平民　大正2年4月，大正9年3月秋田商業転任
教　　諭　世界　政寛　福島県平民　大正2年4月，岩手転任
教　　諭　広山　　仲　岡山県士族　大正2年4月，
校　　医　福原　資孝　秋田県士族　大正2年4月，大正4年12月解職
嘱託教師　永井　元吉　宮城県士族　大正2年4月，大正2年5月解職
書記兼嘱託講師　梨本　　弘　北海道平民　大正2年4月，区立高女転任

(59) 曽根博義『伝記　伊藤整』六興出版　1977年　188-9ページ

教　　諭　林　好一郎　富山県平民　大正2年5月，大正3年3月解職
嘱託教師　北山　晃文　青森県平民　大正2年6月，大正3年12月解職
教　　諭　浅山　正三　青森県士族　大正2年6月，
珠算教師　芳賀　典定　北海道平民　大正2年9月，大正6年6月解職
教　　諭　一戸隆次郎　岩手県士族　大正2年1月？，大正10年4月4日死亡
剣道教師　横溝　堇一，東京府平民　大正2年11月，
教　　諭　山田　辰治　神奈川県平民　大正3年4月，新潟転任
教　　諭　福井　李一　三重県平民　大正3年4月，横浜大和商会退任
助 教 諭　稲垣　雄三　北海道平民　大正3年5月，北商へ転任
英語教師　鈴木　真静　兵庫県士族　大正3年7月，大正4年8月解職
教　　諭　田代　竹司　東京府士族　大正4年3月，大正6年4月解職
助 教 諭　今井七五三太郎　青森県平民　大正4年3月，大正6年6月解職，7年1月死亡
教　　諭　篠原　誠二　長野県平民　大正4年4月，6年8月，滋賀県立彦根高等女学校に転任
教　　諭　五十嵐達太郎　新潟県平民　大正4年9月，5年12月解職
嘱託教師　西尾　　広　鳥取県平民　大正4年9月，5年3月解職
校　　医　望月　温象　広島県平民　大正4年12月
嘱託教師　千葉　繁男　岩手県士族　大正5年1月，転任(60)
教　　諭　岡本　孝正　富山県平民　大正5年4月，8年5月転任
教　　諭　渡辺　　卓　三重県士族　大正5年4月，7年8月　新潟県商業学校転任
教　　諭　皆川　　一　茨城県平民　大正5年4月，
教諭心得　小山内　叶　北海道士族　大正5年4月，北海中学へ転任

(60) 石本氏の思い出に出て來る。アメリカ帰りの英語の先生。「小林多喜二伝……」（『人文研究』87）132ページ

囑託教員　坂本　陶一　東京府士族　大正5年5月，5年12月解職
教　　諭　山本　　昂　岡山県平民　大正6年1月，7月12日新潟中学へ転任
教　　諭　山城　治二　新潟県平民　大正6年3月，東京高商専攻部，解職
教　　諭　晴山　省吾　岩手県平民　大正6年4月，6年12月入営休職
教　　諭　添田　一二　栃木県平民　大正6年4月，秋田商業転任
教　　諭　畑中英太郎　愛知県平民　大正6年4月，6年12月入営休職
教　　諭　富岳(または岡)丹次　新潟県平民　大正6年6月[61]，
囑　　員　斎藤源五郎　宮城県平民　大正6年6月，解職
囑　　員　水田　淳亮　山口県平民　大正6年12月，山口県転任
教　　諭　樽見　義一　石川県士族　大正6年11月，転任[62]
教　　諭　相沢　直矢　英語　解職
教　　諭　遠藤尚一郎　解職
教　　諭　小原　忠吉　大正7年4月。
教　　諭　中道仁左エ門　国語　転任
講　　師　マッキンノン（小樽高商の英語講師）
教　　諭　新妻　胤泰　珠算
教　　諭　小林　金治
教　　諭　八木　又三　国語
教　　諭　柳瀬　敬三　転任
教　　諭　宮本英一郎　英語　転任
教　　諭　斎藤　太郎　国語
教　　諭　南部　栄男　地理　秋田商転任
教　　諭　伊藤孝一郎　国語　中学転任

(61) 彼は厳格だった。生徒との関係に激しいものがあった。
(62) ランニング部の先生。クリスチャン。生物学。(越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年，29ページ。

教	諭	今野　武雄	
教	諭	直江　鉄也	
校	長	大山　　登	転任
校	長	松村　明敏	
教	諭	平野	
教	諭	西原	
教	諭	根岸	商業
教	諭	佐藤	
教	諭	子野日	
教	諭	小野寺	教練
教	諭	兵頭	英語
教	諭	宮越	英語
教	諭	柳沢	英語
教	諭	藤田	転任(63)

多喜二入学の大正5年4月から，多喜二が卒業する大正10年3月までの諸先生の動向であり，相当に移動が多かった事が知れる，つまり60数名が移動している。

26　庁商での同窓生

庁商での小林多喜二の同窓生は，卒業生名簿(64)によると，次のようである。

足立登，阿部藤作，相沢直美，秋田政治，荒谷浩，石ケ森貞三郎，泉忠三，岩倉英二，印藤善幸，小川伝松，小熊直吉，田中（大島）昌次，大符英二，岡広，岡本彦市，奥井賢三，梅津（加藤）喜代治，利部七郎，笠島貞雄，片岡亮一，金井健四郎，川合繁哉，菊池邦雄，黒田藤治郎，小泉吉次，佐藤正

(63) この表は，活字となった「必携」に，安宅先生が後にメモを付け加えたもの。
(64) 小樽商業高校，校友会での調べ。

三，斎藤正七，斎藤次郎，斎藤豪太郎，杉浦光雄，高橋寛一，谷健一郎，寺谷八郎，中原義雄，中山範義，長野金之助，野村新治郎，灰野文一郎，端健之助，橋本嘉一郎，原利光，久末弥一，広瀬善一郎，蒔田栄一，増野久義，三村健之助，宮川三郎，向井才一，村住静二，安井雅二，安田秀，柳館二郎，渡辺善之助。以上の方々は，昭和60年までに亡くなった。次いで，

清水恒男，高橋重雄，土田正五郎，堂城不二人，米田俊夫，稲見賢次郎，石黒鶴治。以上の方々は，少なくても1989年までに亡くなった。

安宅文雄，東谷茂平，石本武明，今村恒二，片桐寛一郎，金谷菊松，藤野戸（坂本）清，那須文味，八反田善吉，札場喜代造，吉田正雄。

初め上級生であったが，留年して，多喜二と同級生となった人々もいる。逆に入学が多喜二と同じだったが，留年してここに載っていない人もいる。また途中転入者も入る。ここには中途退学者も入っていない。重要なのは，予科から本科に行かなかった人もいることであり，それらも入っていない。なお，（　）内は，旧姓である，だから多喜二の庁商時代の，かれらの姓である。また名簿ではＡＢのクラス分けがされていない。

足立登は，多喜二と同時に高商へ，それも学校長推薦＝特待生で，入学した。

秋田政治は，卒業の時，総代であった。答辞を読んだ。

片岡亮一は，親友である。小樽の百一三銀行に就職した。高商の，例の入学制限事件のためか，多喜二に１年遅れて高商に入った。だから伊藤整と同期となった。

金井健四郎は，足立と同じである。

斎藤次郎は，親友である。小樽の百一三銀行に就職した。その後，東京へいくのだった。

灰野文一郎は，当初，上級生であった。

蒔田栄一は，親友である。大連商業から庁商の本科に1918年に転校してきた。庁商を卒業して，東京外語学校へ入り，３年英語を学んだ。多喜二が高商を卒業した時，高商の英語講師として赴任した。

渡辺善之助は，親友である。(旧)北海道銀行へ就職し，若くして死んだ[65]。

安宅文雄さんは，本稿ではいつも登場しているが，現在，兵庫県で健在である。片岡と同じである。

石本武明さんも，すでに本稿ではおなじみで，小樽におられたが，苫小牧へ行き，亡くなられた。

那須文味さんも小樽におられる。

札場喜代造さんも小樽におられる。明治37年1月1日生まれである。札場さんは，思い出で多喜二のことも書いている[66]。

多喜二よりずっと若いが，庁商の卒業生池田さんは，語っている。「当時，小学校を卒業して，丁稚奉公をしてお金を貯めてから，庁商に入学してきた人もいた。だから年齢の高い人もいた。」多喜二の時代もそうだったであろう。

多喜二の入学した学年は，札場氏によるとこうである。「遠くは樺太，稚内，根室，釧路，函館，室蘭，旭川から高等科二年卒業生(明治三四年生まれ)[67]，六年卒業生（明治三六年生まれ)[68] 四五〇名が入学受験し，一〇五名合格入学，大正十年三月卒業。」[69] ただし，ここにある高等科2年卒業生と尋常小学校6年卒業生の生年は，上記の話からして，種々雑多であったであろう。

27　庁商での「想い出」から

庁商では，剣道が必須科目で，早稲田大学卒の優秀な剣道師範横溝先生が指導し，有段者が多数輩出し，道内では覇者の勢いを示した。泉，堂城，吉田，阿部の選手は，大正九年（1920年）全国中等学校大会で準優勝した[70]。

---

(65) 石本氏の教示も利用。
(66) 札場喜代造「四つ葉会の思い出」(『揺籃』昭和62年尊商会発行『総会誌』) 23ページ
(67) 36年生まれとある。なおした。
(68) 37年生まれとある。なおした。
(69) 札場，同上。
(70) 札場，『揺籃』

多喜二は，剣道の道具を担いで登校するのだが，必須科目だったからである。多喜二は，しかし剣道は特にやらなかった。

庁商では，学校の開始時間が，夏は8時，冬は9時であった[71]。

級友の札場さんは，多喜二に関してこう書いている。

「同窓にプロレタリア作家小林多喜二氏あり，小樽高商(現小樽商大)卒業。拓殖銀行小樽支店に勤務し，『不在地主』を書く。当時の商工会議所会頭の磯野進氏所有の……農場の小作争議事件を書いたものであった。磯野氏は拓銀に圧力をかけたため小林氏は退職に追い込まれたと噂された。」こういう噂が出たとは興味深い。続いて言う。

「在学中は絵画と文筆活動を熱心にやり，同窓の蒔田(外語大卒，高商の英語講師)，片岡(日銀)[72]，石本(道銀)[73]と深交あり，小林氏の労働運動以外の家庭的な親交者として色々な話が残されている。」

多喜二の死を紹介してから，氏は書く。「昔も今も先覚者は常に不遇であり酬いられる事なく孤独であると言われているが，小林氏の死はおしみても尚あまりある痛恨事である。『恵ぐまれぬ人々』のため作家活動から更に非合法地下活動にまで放然として飛び込んで行った小林多喜二氏の悲壮勇猛な精神に対し今改めて敬意を表する。感謝する。」[74]

石本氏も書いている。「彼は極めて異色であった。暮らしが豊かでなかったから，伯父の家（パン工場）から通っており毎日帳面書きをし，月末には請求書かきで夜遅くまで仕事をさせられながら通学していたが，試験前になるとクラスの連中は毎日徹夜して勉強し，学校に来ると十分間の休み時間も惜しんで教科書やノートと首引きであったが，彼はエヘラエヘラと皆の勉強している間を歩き廻っており，クラスの連中は「小林は勉強しなくても大丈夫

(71)『必携』
(72) 初め，百一三銀行，その後，日銀
(73) 昔の北海道銀行
(74) 札場，同

かな」と心配したり，中にはわからない所があると「小林教えてくれ」というと親切に教えてくれる。何時も小林の試験の結果は優秀である。兎角すばらしい頭であった。考えてみるとほんとうに惜しい人物であった。／彼の文学的才能は早くから芽生えていた。」(75)

続いて，次のように書いている。「彼が打ち込んだ資本主義に対する批判は文字通り，労働者に対する搾取は，マルクスの理論から一歩も出ないものであったし，彼の性格から言えば，「全く我慢のならない」問題であり，それを文学に依り，強い批判を繰り返したが，それだけでは自分の主義主張で貫ききれないことを見てとり，身を挺して闘争に突き進んだ。しかし心の底から彼は死なしたくなかった男である。」

石本氏は，「主義主張は違っていたが僕とは妙に気が合って，彼の家と僕の家と数多く遊びに行きました。」と言う。ただしこれは，お互いに庁商を卒業して1年後，多喜二が伯父の家から実家に戻って以後である。石本氏は，彼が伯父の家にいる時代は訪問を遠慮した。

片岡は，思い出を書いている。「小樽商業学校時代の小林多喜二は。クラスの交友範囲がせまく，文芸同好の私たち数名のほかとは，あまり交際していなかった。従って一般の同級生の気受けは必ずしも良い方ではなかった。そして卒業も間近いある日のこと，学校の戸外運動場には，二階建校舎の一階の半分位まで埋めるほどの深い雪が積もっていた。平素多喜二の孤高を心よらずとしていた乱暴好きの連中が，よってたかって多喜二のズボンを半ぬぎにさせ，丸出しのお尻を二階の窓の外へ押し出した。そして悪童の一人がマッチをすりながら

『やい，屁をひれ。ガスをつけてやるから……』

とわめきたてた。しかし如何に才気煥発の多喜二とて，当意即妙に放屁など出来るものではない。ことに凡てがちぢみあがるような寒さである。ついにそのまま下のグラウンドの雪の上へ放り出されてしまった。雪国のリンチに

(75) 石本，同

はこんな変ったこともあった。」[76]

28 『素描』

本科3年になった1920年4月ころ，多喜二は回覧文集『素描』を作っている。親友嶋田は，大正9年3月に庁商を卒業し，小樽の三菱鉱業KK北海道売炭所に入社し，同年10月に室蘭出張所に転勤した。『素描』の提案者は嶋田である，とも言われる。しかし嶋田は書く。

……10月に室蘭へ転勤になった。すぐ後，多喜二から同人雑誌をだすから原稿を送るようにと言ってきた。多喜二が庁商3年の時である。嶋田はさっそく「汗にまみれた土塊」という小文を送った。しかし相当時がたっても音沙汰がないので，尋ねると，金がないので出せないのだという返事だった。そこで，原稿を全部嶋田の所へ送らせ，島田が清書して回覧することにした。当時はまだ謄写版が普及していなかった，と[77]。

嶋田はその同人になり，また片岡，蒔田栄一，などが加わった。多喜二主宰の『素描』は第7集まで発行された。だがこれは散逸している[78]そうである。

『素描』第1集は，島田が清書して出した。第2集以後は，多喜二たちが本文を書き，斎藤次郎が表紙を書いて装丁をして出した。最後は第7集であるが，嶋田は多分1921年中だったとしている。その年の初めであれば，多喜二が庁商在学中であり，その年の中ごろ以降であれば，多喜二の高商時代にもかかっている。高商受験を控えて，ずいぶん余裕があることである。

結局翌年までで7集まで続いたが，それ以後は立ち消えになった。これが『素描』という回覧誌で，仲間には，表紙を描いた斎藤次郎，短歌を寄せた片岡亮一などである。

---

(76) 片岡亮一『雪田』149-150ページ
(77) 嶋田（「本郷だより」18号）
(78) 嶋田，手塚

多喜二が『素描』に書いたものでは，「ひる!!」と，随筆とである。現行『全集』第7巻所収の「ひる!!」は，『素描』に載せたものの改作だとされている。

会社の事務所へ腩(ママ)細工を売る中国人が来て，事務員達が彼をからかってやり取りをする軽妙な小品だった。違った表現をすると，嶋田によると，こうだ。「多分フィクションですが，銀行のある一日を書いた作品がありました。支那人が腩(ママ)細工を売りにくる場面がある。それがいかにも多喜二が銀行で執務している感じで，よく書けていた。」(79)

大正10年の夏，嶋田は年休を貰って，小樽へ帰り，多喜二の家に行くと，『素描』の一つがあって，「ひる」が載っていた。回覧した女学生が，感想欄に，「ふざけていて良くない」と書いてあった。多喜二はそれを，「わからないって仕様ないものだ」と言っていた。

それから，嶋田は多喜二と蝦夷富士に登ったり，多喜二の親戚がいた石狩の町へ一泊旅行をし，絵をかきにいった。その石狩旅行は，多喜二が『素描』に掲載した。感想文あるいは紀行文であった。それは，嶋田氏が，室蘭から小樽へ転勤になって間もなく，おそらく大正12年ころ，であった。

石狩川の河口にある石狩町であった。軽川駅（現在手稲駅）から3里位の道を歩いて絵をかきに行った事がある。川岸の草原に三脚を置いて，一望さえぎる物もない平原に電柱が行儀よく並んでいる風景をえがいた。川辺からの石狩平野であった。嶋田は多喜二の描いた地平線が高すぎると思ったので，注意すると，「俺のデッサンは狂っていない」と言っていた。

また宿の家は，多喜二の姉の結婚先の親戚であったが，その子供と話しているのが，機知に富んだやり方だった。

その時の紀行文以外に，彼の文学論ともいうべきものが『素描』に掲載された。作品を書くには，平行線的に平面的にではなく，底の底まで抉り抜くようなものでなければならないという論旨で，特に垂直線という言葉を使った文学論を書いていた。つまり多喜二の随筆的論文は「垂直線的態度と平行

(79)『北方文芸』1968年3月

線的思索」？　という題で，その論旨はこうだったと，島田は書いている。

「作品を書くには平面的で浅く広いものではなく，狭くても底の底までえぐるようなものでなければならぬ」。そして文章と風味は，廚川白村の『近代文学十講』に似ていた[80]文学論を書いていた。あるいはこういう風にも嶋田は言う。「広く知識を出すんじゃなくて，一つ事を深く掘り下げて行くのがいいんだ，と。それが彼の一貫した態度でしょうね。」[81]

嶋田は大正11年の春，元の小樽の事務所に戻って，また毎日のように多喜二に会っていた。『素描』第7集はこの時までに出したように思われる。

手塚は「『素描』はその年の暮までつづき……」[82]と書いている。その年とは1920年である。なお「卒業期を控え，回覧雑誌「素描」が廃刊になった……」ともある[83]。嶋田は，だから手塚さんの小林多喜二小伝のこの部分は真実を伝えていないと思う，と書く。回覧誌を作るという話が1920年の10月に起き，その暮れまでで7集も出るとは考えられないから，嶋田の方が正しいであろう[84]。

小説を旺盛に執筆したのは，やはり絵の禁止以降のことである。彼は絵筆を取れない憤まんを創作に向けて行った，とされる。しかし，伯父に絵を禁止されても，実際本当に止めたとはいえない。すこしは描いていたらしい[85]。彼が，絵を禁止されなくても，文学へ傾斜していった可能性は大きいだろう。

29　店先で

多喜二の伯父の店・工場は，海軍艦船御用達と看板に書いてあり，盛大にやっていた。その代用パンは，ビルマ豆の入った美味しいもので，米飯の不

(80) 嶋田，手塚
(81)『北方文芸』1968年3月
(82) 手塚，50ページ
(83) 同，59ページ
(84) 嶋田「本郷だより」18号
(85) 嶋田

足を補うものとして，食べられた。店に続いた奥にパン製造の仕事場があり，仕事に合間に，もうもうと白い湯気の仲に多くの職人が立ち働いていて息抜きに外気にふれる裸の男たちが汗をぬぐっている姿が往復の通学生に見えた。秋田県出身者が多いらしく，店の小僧にトメジというのが店番をしていた。パン兼菓子の小売の係である。

ある時，小樽中学上級生の一団がつり銭か何かのことでトメジと激しい口論をはじめた。お互い激昂したとき，奥の間から16，7歳の男がでてきた。多喜二であった。彼が仲裁に入って事なきをえたことがあった(86)。

それを風間六三が見ている。多喜二が庁商3年（本科）のときと思える。

境一雄は云う。この三星パン店というのが，当時の市内のパン店ではたった一台という配達用の車を持っていた。多喜二少年にはこれが自慢のタネだったようだ。当時われわれ樽中の悪童連は腹がへってくるとよく三星パン店のパンを盗みに行ったものです。すると多喜二少年が「うちの店はパンを盗まれても自動車を買えるほどもうかっているんだ」とヒヤかした。これにはまいった，と(87)。

30　高商受験

さて庁立商業学校の卒業が近づいた。多喜二は，再び伯父の援助を受けて，小樽高商に進学してもよいことになった。

彼がこのように上級学校へ行けるというのは，不思議である。彼の家のように裕福でない者は，どんなに勉強ができても小学校で終り，中等学校である商業学校でさえも行けないのが普通である。もちろん小樽商業には伯父の援助で行けたわけである。両親もそれを望み，小学校の先生も強く薦めた。商業学校を卒業するだけでも，彼のような者にとっては，僥倖なのである。

---

(86) 風間六三「二人の作家との出会い」『北方文芸』1978．1。
(87) 境一雄（『北海道新聞』1962．3．19)。境は話の当時，小樽市会議員であった。氏は，多喜二が尋常小学校5，6年ころから，多喜二の記憶があるという。

それが高商に行けるとは……

多喜二が小樽高商に進学してよいということになった理由を考えよう。

当時中等学校へ進学する者は，今の4年制大学へ進む率より少なかった。その上に，高等教育を受けるというのは並み大抵ではなかった。その状況で考える必要がある。

多喜二が進学できた理由は，商業に行けた理由と共通している。先ず，多喜二が勉強ができたこと，伯父の商売がうまくいっていた，伯父の心理的問題など，チマが高女に行けた理由とも同じである。

それ以外に，小笠原教授は出世払いだったのではないかと，語っている(88)。高商は道内ではエリート校であった。北海道に高等教育機関は，北海道帝国大学と小樽高商しかなかった。高商に入れば出世は間違いなしであった。だから伯父も安心して学資を出しただろうと，言う。この出世払いは，彼が高商を卒業してから伯父に学資を返済するという意味かどうか，不明である。

最後の理由として，多喜二自身が「略歴と作品その他」の中で，興味あることを記している。

「一九二四年，小樽高等商業学校を卒業した。少し金の出来た親類が一方では虐使しながら，見栄のためにそうしてくれたのだ」(89)

彼は，伯父が見栄のために出してくれたと，見なしているのである。尤もこの文は短いせいもあって，部分的には混乱している。「虐使」したのは，庁商時代と，初めの頃の高商時代である。伯父の家で厄介になっていた時期である。高商の途中から実家に帰るので，少なくても本人はその時期からは虐使されていない。

彼が高商へ行けた理由の大きなものは，いままでの伝記と違って，彼がまだ伯父の家で手伝いをするということであった。これは後述する。

さて，大正6年に，中学卒業者は2万1千人だった。原内閣の教育推進政

---

(88) 講演「小林多喜二の世界」1986.3.29，小樽。
(89)『全集』第5巻，93ページ

策にもよるが，大正年間に，生徒数は，中学校は12万人台から31万人台へ，高等女学校は，6万人台から29万人台へ（実科高等女学校をのぞく），実業学校は4万人台から19万人台へ（乙種実業学校をのぞく），増えた。

多喜二は小樽高商を受験することになった。受験を前にしながら，創作にも努力していた。彼はワラ半紙を綴じた「生れ出ずる子ら」という標題の個人誌を作りだした。これは3号まで出るが，その初めの号だけが庁商時代の産物である。受験を前にしながらも，随分余裕のあることである。

多喜二が志賀直哉に傾倒し始めるのは，友人嶋田正策が買った菊池寛『文芸往来』(大正9年6月刊)での礼賛を読んでからという(90)。だからどんなに早くても庁商最高学年の後半以降である。

友人たちも卒業を迎えて，就職その他を決めた。片岡亮一と斎藤次郎は，小樽の百十三銀行へ，渡辺善之助は，旧北海道銀行へ就職した。蒔田栄一は，東京外語学校を受験した。彼は同校を3年後に卒業して，小樽高商の英語の講師として赴任し，多喜二たちと再び文学サークルを作ることになる。嶋田正策は，一級上であって，前年三菱鉱業に入社しており，室蘭支店に勤務していた。級友石本氏は，多喜二から，高商に進学するよう誘われたが，家の都合で進学できず，(旧)北海道銀行に就職した。

1921年に庁立小樽商業を卒業した多喜二は，高商の入学試験を受けた。定員は189名で，競争率は4倍であった。彼は小説「父の危篤」で，小樽高商受験の時の状況を書いている。——英語はできたが，商算と簿記ができなかった。親類からやって貰っているのに，もし落ちたら大変だという気持ちであった。自分の家でも試験に心配して，神様に神酒をあげていた(91)。——

この描写はノンフィクションだと思われる。実際次の話が残されている。

受験生久木久一が，高商の入学試験の時，簿記か商算の試験が済んで，昼の弁当を食べていると，握り飯を掴みながら，

(90) 嶋田，『全集』月報
(91)『全集』第1巻，139ページ

「オイこの問題はこれでいいのかい」と，
見ず知らずの彼のところに聞きに来たのが多喜二だった[92]。

久木は，後に彼と同級になり，またその後，高商の教師になる人である。

だが多喜二は合格した。そして入学は5月であった。

31　3人だけの入学

当時，小樽高商に特待生の制度があり，各校から毎年2名ていどの成績優良生が無試験で入った。今の言葉で言う推薦入学である。ただし全国の有名商業学校からである。庁商からは2名の推薦があって，足立登と金井健四郎が，それによって無試験で入学した。

多喜二は推薦に入っていなかった。庁商からは数名が高商を受験した。それはだから競争入試である。その中で小林だけが合格した。この年は，意外なことであるが，庁商からの浪人も合格しなかった。こうして多喜二は，競争試験による合格者としては，庁商からはただ1人だったのである。これには政策的理由があった。

高等商業学校は建前上，商業学校の卒業生を受け入れる学校ではなかった。主に，中学校卒業者を教育する学校であった。小樽高商では，1年生4クラスのうち，商業学校卒業生は1クラスにまとめられた。つまり入学者のほぼ4分の1である。しかしそれにしても，庁商からの入学者が3名とは，いかにも少ない。いつもは十数名入っているからである。実はこの年は例外であった。

その理由は安宅文雄先生によると，こうである。

多喜二の年の卒業式に，すでに述べたように，卒業生代表秋田政治が答辞の中で，学校当局への希望事項を加えて発言した。勿論これは，生徒の合意のもとに文案したものである。だがこういうことは，北海道の学校としては，例のないことであった。新聞もこれを取り上げ，父兄の議論になった。先例

(92) 久木「多喜二の思い出」(『緑丘』四二号)

として，札幌師範学校に１回あったとのことである。

黒沼校長が秋田商業の校長として栄転し，次の大山登校長が，就任してわずか４カ月で，函館商業に転任し，という具合いに校長が次々に代わって，かつての黒沼校長が築いた校風や職員の結束もばらばらになり，指導方針が一変したので，教員の移動も多くなり，従来のような楽しい授業が受けられなくなった。ここで学生たちは，学校として善処してもらいたいという要望を盛り込んだのである。これは今から見れば，当然すぎるほど当然である。

この卒業生答辞で，学校側へ要望したことが，競争試験でただ１人しか庁商でを採用しなかった原因だったと，安宅氏は言う。

この問題が小樽高商にもひびいたことは当然と思われる。危険な生徒ならば，合格しても迷惑なことである。そこで最小限の３人になった，というのが安宅氏の説である。尤も，そのうちの２人は特待生だから，競争合格は１人である。

卒業式ごろから庁商で学校騒動，校長排斥運動が始まったとされるので，それが高商側を意識させたのではないかと，私は思うが，それは推測である。当事者であった安宅氏は，卒業生答辞が問題になったと理解している。

そうすると大正時代の社会風潮は，ずいぶん硬い非民主主義的なものだったこと，生徒の自主性は殆ど認められていなかったということが，浮き彫りにされる。

さてしかし，生徒側の善意が高商でも了解したためか，翌年は多喜二の庁商同期生や上級生も多数入学することになった。つまり平年通りとなったのである(93)。こうして不運にも，多喜二の卒業年ではたった１人の競争試験入学者が許されただけとなった。通例であれば，庁商から競争入試で合格したであろう十数名が，多分合格点をとっていながらも，落とされたのにちがいない。この中で多喜二だけが合格したのは，試験で非常によい点をとったからであろう。

---

(93) 安宅手紙。

32　小樽，点描

大正時代，小樽の桟橋には，春にはつばめ，冬にはかもめや海猫が，よく群れた。釣糸をたれる人も多く，外国の様々な色の巨船や軍艦，日本の貨物船やはしけの出入りも多かった。春には季節の行事のように，外国の軍艦や巨船が入港して市民の見学を勧誘した。当時の小樽の人々は，ロシア人に親しみをもち，小樽の街にも何人かの白系ロシア人が定住していた。彼らのつくるパンはとてもおいしく，パン屋も繁盛していた。

大正時代の小樽は，北洋の水産物と，石狩平野の農産物の集散地であり，豊富な埋蔵量を誇る幌内・赤平などの炭鉱地帯を控えた石炭の積み出し港として，日本でも有数の商業地として栄え，港にはいつも多くの船が停泊して，商取引は賑わった。

当時の小樽の名士には，東北地方や北陸地方の出身者が多かった。故郷を失った人が多かったせいか，「おくに丸出し」の狭い料簡の人は嫌われたらしい。ほとんどがよそ者であったので，小樽の人の性格は，開放的，進歩的で，闊達，豪放な人が多かった。武士階級出身者が多かったせいか，文化水準は高く，絵画，墨蹟，陶磁器等の骨董品の売立てのせり市が，多く催され，山田町には骨董品の店がたくさん並んでいた。

正月には百人一首の歌留多とりが盛んであった。東京のものとは違って，下の句を読んで，下の句をとるのだった。4日は初荷である。小樽は4月まで雪に閉ざされて，あまり活発な行事はない。毎日必ず雪が降るから，雪かきは必ず行わねばならぬ重要な日課である。そして煙突掃除，石炭の出し入れが必要だった。

小樽は坂道が多いので，スキーを楽しんだ。割った竹にろうを塗って，雪下駄の下にくくりつけて滑る。大正12年ころまではゴム長は履かないで，わら靴を使っていた。ゴム長は，金持ちでないと買わなかった。昭和になるとスキーが盛んとなった。

4月半ばから雪がとけ，この頃のぬかるみ道は最悪である。5月には春が

くる。こうして小樽，北海道では，春が遅い。この春を待つ気持ちは，柳田国男『雪国の春』で叙述されるのと同じである。梅も桜も桃も水仙もたんぽぽも，一度に咲く。15日には招魂祭の祭りが行われる。5月には，べこ餅を食べる。米の粉でねった黒砂糖の入ったべっこう色の餅である。7月15，6日は住吉神社のお祭りで，小樽中が休みであり，皆参拝に出かけた。15日には朝から御神輿が出て，街を練り歩く。その夜は神楽である。そして祭りの催し物は，猿芝居，ろくろ首，蛇娘，娘かっぽれ，どじょうすくい，である(94)。11月になると雪がちらつき出す。すると母親たちが，種々の大量の新香を漬けだし，越冬の準備をする(95)。

小樽でのバスの始まりは，大正9年4月創立の小樽乗合自動車合資会社であり，稲穂町東7丁目に本社があった。車体を青に塗ったフォード5台で，「青バス」と呼ばれ，若松町——第1花園大通り——手宮，を走った。翌年，稲穂町西7丁目に小樽市街自動車株式貨車が設立され，フォード8台を茶褐色に塗って，「赤バス」と呼ばれた。奥沢口——花園第2大通り——手宮，まで走った。2つの会社は，大正12年に合併し，小樽市街自動車株式会社になった。本社は稲穂町東2丁目となった。(越崎)

明治から大正にかけて，舗装道路ではなかったから，小樽では鉄輪の荷馬車が唯一の貨物運搬機関であった。

雨の日には道路が田圃のようにドロンコになり，馬車がぬかって馬車追いは難儀をした。啄木が論じたのはそのためである。車が進まなくなると，馬は手綱でたたかれ，短腹な馬子には丸太で打たれた。それでもぬかったら仲々進まない。通行人も車道を横切って向こう側へ行くのが容易ではない。ゴム長は高級店にあったが，庶民の手には入らなかった。

雪が降っても，除雪車が通るわけでもなかった。両側の店舗は自分の店の雪をかき，車道へ放る（小樽では，投げる，と言う）から，車道は雪で高く

(94) 一部は現在も行われている。
(95) 金子たみ子『小樽　幼き日』西田書店　1985年

なった。路面より3尺も4尺も高く踏み固められた。車道が高くなっても，冬には馬そりで通れた。だが3月，雪解けのころが問題となった。馬ふんが表面に表れて，そりの滑りも悪くなる。道路の凸凹が激しくなり，水が溜る。往々にして，荷物満載の馬そりがひっくり返り，馬さえ共に倒れる。積荷が道路一パイに広がる。これが毎春，特に下町通りに見られる小樽風景だった。

そこで毎年4月3日の神武天皇祭が雪割日と定められた。この日は全市の荷馬車業者が営業を休んで，ツルハシやスコップを手にして，集団で道路の固い雪を割った。荷馬車は経済都市小樽のシンボルだった(96)。

補遺

1．前号（『人文研究』87輯）120ページで，米騒動について触れたが，小樽の米騒動について1つの聞き取りが得られた。小樽の及川清先生からのものである。以下，紹介しよう。

大正7，8年の小樽の米騒動で，指導者の一人は，熊木外吉(そときち)であった(97)。その父は熊木伝右衛門といい，渡し守であった。高岡の人である。乗客が酒のみにからまれているのを助けた。その乗客は加賀藩の重役の娘であった。寧女と言った。これが縁で2人は結ばれることになった。しかし身分違いなので，籍を移してから結婚した。彼は回船問屋を始めた。2人には子供が生まれないので，養子をとった。しかしその後，寧女が40近くで子供が生まれた。それが外吉であった。そのため寧女は自分の子供・外吉と家を出た。外吉は，富山県・高岡市で18歳の時，寺子屋の師匠をしていたほど学問があった。彼は材木問屋の支配人になった。金沢で火事があり，大変な利益をえた。外吉はそれを，履災者のために長屋を建てることに使った。だがそれが公金横領となり，逮捕された。裁判所も困った。

(96) 越崎「ゆきわり」
(97) 及川清先生の祖父。

牢では鍵ご免となり，昼は外出でき，夜だけ戻った。彼はそこを逃れた。

その後，外吉は函館を経て小樽に移り住み，沖仲仕の仕事を始めた。若い人たちが随分かれの家の中にゴロゴロしていた。彼は親分格で，面倒見がよかった。

小樽の米騒動では，外吉は皆を代表して捕えられた。そして網走へ護送中，銭箱あたりで，小便に行くといった。彼は人望があった。同行中の警官が，好意でそっと手綱（当時は綱だった）を外してくれた。汽車から飛び降り，船でウラジオストックに逃れた。その後，根室経由で帰ってきた。密貿易をした。頭の切れる人であった。若くして，40いくつか50歳くらいで，毒酒を飲まされて死んだ。

2．前号139ページ14行，「その時の彼のスナップ写真が残っている。」とあるが，それは，手塚英孝編『写真集　小林多喜二——文学とその生涯』新日本出版社1977年[10]ページにある。この本は，有難いことに小生が村山出先生（小樽商大教授）に戴いた。

3．嶋田正策氏は，1994年7月23日，93歳で亡くなられた。

訂正

1．前号88ページ15行，「が小学校に入った」は，誤り，「一家が小樽に来た」が正しい。

2．前号90ページ。色内小学校に次のただし書きをつける。「ただし，明治31年（1896年）3月，色内小学校の分教場として設置。」（『小樽区史』233ページ）

下記の6点が，有難いことに琴坂先生から指摘・教示があった。それを参考に訂正する。

3．前号86ページで，「明治24年に小樽と高島が合併した。」とあるが，これは間違いである，と。小生は，倉内孝治編『小町谷先生の小樽の思い出』(昭和30年) 17ページで，それらしい表現を見つけたので書いたのだが，

間違いであった。

4．前号88ページで，新谷辰次郎について記述した（出典は堅田）。辰治郎とも言われる。彼は市議会議員になったことがあり，新谷仲仕部を作っていた。1927年の港湾争議の時に，留萌で労賃不払い問題を起こし，小樽合同労組に糾弾されている。（琴坂編著『磯野小作争議・小樽港湾争議　資料集』不二出版1990年78から81ページ）1926年4月，留萌の労働者110名が新谷親子（子は，力蔵または力造）に雇われて，樺太の富内と柏尾に木材積取に出稼ぎした。小樽に帰ると賃銀が払われなかった。留萌では家族は悲惨な目にあった。そこで辰治郎親子糾弾問題がおきた。少なくとも，1927年3月24日付けの活字のビラ，日付不明の手書きビラがまかれた。25日に新谷仲仕部賃金不払真相発表演説会が小樽で開かれ，26日に第1回の裁判が開かれた。

5．前号110ページで，伯父の住居と工場の距離が100m，109ページで150mとした。2つの種類の記述が今までされていた。しかし琴坂先生は50mであるとした。

6．前号111ページで「住んでいる家つまり伯父の家――新富町五八番地――で朝食をとり，店で働き」と書いたが，住んでいる伯父の家は旧住所新富町畑15番地，現在真栄2丁目3番地であり，店が新富町五八番地，である。

7．前号126ページ，「教練」が2カ所挙げられてある。しかし当時，教練があったとは思えない，と。

8．前号132ページ，「石本少年は当時，弁天町（その後の仲の町，今は松ケ枝町）にいた。」と書いたが，正確ではない。こう表現するべきだ。石本少年は当時，弁天町，その後，仲の町に住んだことがある。弁天町は今は松ケ枝町である。仲の町は今はほとんど松ケ枝町であるが，一部分は入舟町にもなっている。